

## 基盤／制度—二つの不可視性をめぐって

影浦峽<sup>†</sup>

<sup>†</sup> 東京大学大学院教育学研究科

2009 年 6 月 13 日に行われたパネルディスカッション「生涯学習を支える基盤とは何か」を受け、生涯学習基盤経営コースの教員として「学習基盤」の位置づけと性格を考える。

キーワード：生涯学習基盤経営，学習環境，制度，基盤

基盤は、基盤であることに成功すればするほど、当たり前のもので意識されなくなり、目に見えないものとなる。それが可視化されるのは、「健康」と同じで、うまく機能しなくなったときであり、あるいは大きな変化が進んでいるときである。その点で通常は不可視な基盤であるが、実はもう一つまったく別のレベルでの不可視性も基盤（あるいは第二の不可視性を考えるにあたっては制度と言い直したほうがよいかもしれない）にはつきまとう。この二つの不可視性を、ここでは考える。

例えば最近、日本のいくつかの大学や大学院で積極的に検討され、導入されつつあるという英語での授業。日本語から英語に授業を切り替えるにあたって、これまで当然の環境を構成していたがゆえに不可視だったものが露呈する。教材や教科書をどうするか。課題図書は英語のものを指定するのか。日常的な生活を観察するテーマだった場合、そこで観察された現象の一部に組み込まれているだろう日本語という言語はどうするのか。長年の経験から自ら書いた日本語の教科書を使っている場合、他人が書いた英語の教科書に切り替えるのか。そのとき、中学校・高校での学習内容との接続はどうなるのか。さらに、英語の課題図書を与えたとき、学生全員がタイムリーにその図書にアクセスできる流通基盤は確保されているのか。教員が授業経験を生かして新たに英語で教科書を出版する場合、出版社との連携や日本での流通体制などは十分に整備されているのか。学習の場で何かを変えようとするど、自明のものとなされてきたそれまでの基盤が突然不自由な制約としてたち現れる。

今回、パネルディスカッションでお話をいただ

いた三名の組み合わせは、通常は自明のものであるがゆえに教育学における反省的認識の対象ではなく前提とされがちな不可視のゆるやかな基盤の存在を可視化すべく意図的に選ばれた、といえ言い過ぎになるだろうが、主催者側には、基盤の可視化に貢献すればとの意図が少なくとも部分的にあった。すなわち、教育研究の花形である学校教育を考える立場からは、例えば図書館や公民館、博物館、美術館といった生涯学習基盤は環境として後景に退く。一方、図書館や公民館、博物館、美術館といった施設としての生涯学習基盤を考える立場にとって、出版や芸術活動、NGO や NPO の活動、町おこしや村おこしなどはしばしば後景に退き、あるいは無関係のものとして視野の外に置かれる。今回のパネルディスカッションが、一般に後景化されがちで視界に入るものの陰に隠れた、あるいは視界の外に追いやられたいくつかの活動を生涯学習基盤の一部として積極的に捉え直す方針を示唆したものと言えるのは、こうした図式のもとである。

もちろん、無節操に様々な活動や組織を生涯学習の基盤であると宣言したところで、実質的に何が得られるわけではないから、「生涯学習」という言葉が全てを含むまでに希薄化せず、一方で既に確立した可視的对象のみを扱い続ける狭視野にとどまらないバランス感覚は必要になる。

とはいえ、ここで話を進めたいのは、もう一つの不可視性についてである。この、もう一つの不可視性について、暫定的に、次のように表現することができよう。

広く NGO や NPO の活動、町おこしや村おこしの現場で発動している学習とその環境を目に見

えるようにしたところで、実は基盤あるいは制度そのものを可視化したことにはならない。制度そのものは相変わらずそうした可視化のプロセスさえも包み込んだかたちで自明性の光の中に姿を隠すことになるからである。制度の変容にしたところで、確かにそれがいつとき制度の存在を前景化するにせよ単にそれは一つの制度からまた別の制度へという本来可視的なものが入れ替わったに過ぎず、両者を貫く制度そのものは相変わらずまたその変容を包み込んだかたちで温存され認識の対象ではなく条件として自らを見えなくするであろう。このとき見えなくなる制度というものは、後景に退くために見えなくなるような、隠されていたがゆえに何らかの機会に可視化されうるものではなく、ただ単にそこにありながら見えないような、まったく別の種類の不可視性をまもっている。

そのような不可視性を触知することがどうして学習基盤を考えるために必要か？ トイレや上下水道といった社会基盤ならば、この、第二の不可視性を考える必要はないだろう。ところが、学習基盤を考えるとときには、隠れていた基盤を可視化するという枠組みだけでは本来的に不十分であり、第二の不可視性の存在を少なくとも意識する必要がある。というのも、誤解と説明不足の誹りを恐れずに言うならば、学習の前と後をつなぐものは、この第二の不可視性のもとにある制度の微細な、けれども同時に本質的な裂け目に関わるからである。学習が、その前にあるものから広い意味で計算されうるものであるならば、学習の後に来るものはその前にあるものにあらかじめ組み込まれていたと言わざるを得ない。つまり、既に知っていたものの学習という矛盾に帰着せざるを得ない。これが学習ならば、計算し最適化する技術力、隠れたものを暴き出すテクノロジーだけで学習ができることになろう。それを考えるだけでよいならば、第一の不可視性のみを扱い、必要に応じて基盤を対象化し、反省的認識のもとに組織化すればそれでよい。

しかしながら、学習の経験が、学習者個人にとっても、たまたま教える立場からその学習の現場に遭遇した幸運な人にとっても、そのようなものではあり得ないことは、むしろ極めて多くの人が自らの体験を通して漠然とながら理解しているだろう。ただ、ほとんど全ての場合、それは天から降っ

てくる恩寵のように一瞬煌めいたのち、すぐさまそうした事件が起きたということだけがわずかに残るばかりでその事件が何であったかについてはすべて忘れ去られたかすかな記憶に姿を変える。この経験を実践の中でときおり訪れる恩寵として待つのではなく、そのものとして捉える可能性はないだろうか？ そのときに変容を被るものが、反省的認識の対象として捉えられる学習基盤の奥行きを深め幅を広げたときに奥へ奥へあるいはその外へ外へと常に逃れるものであるかのように自らを示しながら、実際には最初からそこにあり続けるものとしての基盤であるならば、それを捉えるためにはどのような振舞いをすればよいのだろうか？

「生涯学習基盤経営」という言葉で、学習の上に「生涯」が付いているのは、それによって対象範囲を学校教育外のものに絞るという通常の意味があるほかに、こうした学習の経験が生涯を通してどこにでも現れうることを示唆するものであり、最後に付加された「経営」という言葉は、人がこの言葉で思い浮かべるであろうものの手前に、これまで恩寵として感じるにとどまっていた学習の瞬間を触知するある種の構えを逆説的に凡庸な言葉を用いることで暗示するものである。かくして、「生涯学習基盤経営」コースでは、基盤をめぐる二つの不可視性の存在を意識する。

恐らく外部の方々からは、ここに寄稿した生涯学習基盤経営コース所属の三人の教員の中で「生涯学習基盤経営」から最も遠くに位置すると見なされるだろう私が、「生涯学習基盤経営」にむしろ積極的な態度を示しているのは、以上のような理由による。現在、私たちはオンライン翻訳支援・ホスティング・サイト「みんなの翻訳」(<http://trans-aid.jp/>)を開発し運営しているが、この実験は、翻訳を取り囲む制度について、第一の不可視性を技術的に可視化し、現在急速に発展しているオンライン翻訳を支援するとともに、学習の基盤がまとう第二の不可視性を触知する試みでもある。ここからは宣伝です。「みんなの翻訳」は、NGOやNPOの翻訳だけでなく大学院のゼミでも活用されています。グループで活用するための豊富な機能も提供されています。誰でも登録できますので、皆さんもぜひ登録し、使ってみてください。

## **Act, System, and Infrastructure: Consideration Concerning the Rip of Natural World and the Existence of “ I ”**

Atsushi MAKINO <sup>†</sup>

<sup>†</sup> Graduate School of Education, the University of Tokyo

Keyword: Life-long Learning, Act, System, Society, Infrastructure, Language

## **Making of “Life-long Learning Infrastructures” = “Knowledge Infrastructures” in Japan**

Akira NEMOTO <sup>†</sup>

<sup>†</sup> Graduate School of Education, the University of Tokyo

A short essay which describes the author’s opinion about relationships between adult education and libraries in the context of making of the life-long learning infrastructures in Japan.

Keyword: Life-long Learning, Adult Education, Libraries, Occupation Period (1945-1953)

## **Infrastructure and System – Two Types of Invisibility**

Kyo KAGEURA <sup>†</sup>

<sup>†</sup> Graduate School of Education, the University of Tokyo

Keyword: Life-long Learning, Infrastructure Management, Educational Environment, System